O10-6

遷延性意識障害例におけるゾルピデムの一過性かつ反復性の覚醒作用　－症例報告－

Transient and Repetitive Arousal Effect of Zolpidem in a Case of Prolonged Consciousness Disturbance

小山　明子[1]、布田　一枝[1]、萱場　文[2]、大和田　宏美[2]、老松　廣子[1]、佐藤　知子[1]、中里　信和[3]、長嶺　義秀[3]、藤原　悟[3]

広南病院　東北療護センター　看護部[1]、広南病院　理学療法室[2]、広南病院　脳神経外科[3]

Akiko Oyama[1]、Kazue Fuda[1]、Aya Kayaba[2]、Hiromi Owada[2]、Hiroko Oimatsu[1]、Tomoko Sato[1]、Nobukazu Nakasato[3]、Yoshihide Nagamine[3]、Satoru Fujiwara[3]

Department of Nursing, Tohoku Ryogo Center, Kohnan Hospital, Sendai, Japan[1]、

Department of Rehabilitation, Kohnan Hospital, Sendai, Japan.[2]、Department of Neurosurgery, Kohnan Hospital, Sendai, Japan[3]

【はじめに】最近、ゾルピデム（マイスリー[R]）投与により一過性に失語症が改善したという症例報告が発表された（N. Engl. J. Med 350 : 949-950, 2004）。当施設でも不眠を伴う遷延性意識障害患者に同剤を投与したところ、一過性に意識の改善を繰り返した一例を経験したのでここに報告する。【症例】54歳、女性。2001年8月原付自転車走行中、車に衝突して受傷。JCS 200、左急性硬膜下血腫、遅発性脳出血（左小脳、左前頭部）が認められた。開頭手術も施行されたが、遷延性意識障害の状態となり、2003年2月に当センターに入院となった。入院時の広南スコアは64点（重度）で、重度認知障害、発語不可能、意思疎通不可能の状態であった。【入院後経過】夜間不眠のため、8月よりゾルピデム10ｍｇの投与が開始された。9月夜間での途中覚醒時、日中にはない表情がみられ、促すと従命動作、発語が認められた。看護介入として、覚醒時の発語、食事の自力摂取の促しなどを積極的に行った。現在内服前の広南スコアは56点、内服後は広南スコア18点であった。発話が出現した当初と比較して、認知面では、場所、季節の見当識が改善し、表情にも変化が見られた。また、SPECT検査では明らかな脳血流の改善が見られている。【結論】ゾルピデムの投与により遷延性意識障害患者に一過性の意識改善効果がみられたことは機序の解明が待たれる一方、新しい意識障害の治療法として期待できる可能性がある。看護介入としては、薬剤投与と平行して積極的に覚醒を促し、日常のコミュニケーションや日常生活動作につながるアプローチをこころがけていきたい。